

1. 活動日程・会場・目的

日程：2016年 7月6-10日

会場：ドイツ連邦共和国 バイエレン州・Kloster Irsee にて開催された国際学会 European Conference on Pattern Languages of Programs に参加

目的：論文“Creative CoCooking Patterns: A Pattern Language for Enhancing Team Creativity through Cooking”の発表

2. 活動の目的

本研究では「協働料理」を介した組織の創造性向上を支援するツール「クリエイティブ・コーッキング・パターン」を、「パターン・ランゲージ」と呼ばれる研究手法を用いて開発し、実践することを目的としている。今回の活動ではこの研究の理論、プロセス、成果、そして実践についてまとめた学術論文を“Creative CoCooking Patterns: A Pattern Language for Enhancing Team Creativity through Cooking”というタイトルのもと執筆し、パターン・ランゲージに関する国際学会 European Conference on Pattern Language of Programs (通称 Euro PLoP)にて発表し、そこで得たフィードバックをもとに研究を更に向上させることを目的とした。

3. 活動の成果

今回の活動を通して得られた成果としては、発表のフィードバックやワークショップを通じた研究の改善や更なる向上が挙げられる。

Euro PLoPは世界中からパターン・ランゲージの専門家が集う学会である。パターン・ランゲージの理論と実践を専門に研究している人は世界的に少ないので、彼らが一堂に会するこの学会は、とても貴重な場であった。

さらに本学会における発表のプロセスは従来の学会とは違い、より有益なフィードバックを得られる仕組みになっていたことも重要な点である。今回経たそのプロセスは、次の通りである。まず論文の採択の後に、「シェパード」と呼ばれる論文やパターン・ランゲージのエキスパートが割り当てられ、論文の内容について密に議論することで学会までに論文の内容を更に洗練させた。このシェパードから論文やパターン・ランゲージの内容についてコメントをもらい、それをもとに論文を修正していくプロセスを3ヶ月間に渡って合計3回繰り返した。

このプロセスを経た後に、学会当日にはこの論文を「ライターズ・ワークショップ」と呼ばれる形式で発表した。ここでは、5人ほどの小グループに分かれ、一論文あたり1時間ほどかけて、「より良いものを共につくっていく」という思想のもと、参加者全員でその内容について議論する。従来のプレゼンテーションとは違い、各論文ともじっくりと時間を割いて検討するため、より深く本質的な部分に関する議論が行われた。また、参加者は皆パターン・ランゲージに精通しつつも、それぞれ異なった研究や文化のバックグラウンドを持っているため、幅広い観点からのコメントを貰うことができた。

このプロセスを通して、本研究の中心的テーマである「協働料理を通じた創造性とコミュニケーションの支援」について深い議論が行われた。学会参加者はソフトウェア開発者や教育者、組織デザインを専門にする人が多い中、「料理」をテーマにしている本論文は異色の存在である。それでもこの学会に「料理のパターン・ランゲージ」に関する本論文を提出したのは ①パターン・ランゲージの新たな応用分野を開拓するため、そして②教育や組織デザインの分野で「料理」の応用可能性を発見するためである。

実際、ワークショップの中では論文で語られている観点に介してそれぞれ深い議論が行われた。内容に関しては概ね好印象で、その上で実際に大企業で働いていたり、様々な教育レベルで教師を務めていたりする参加者からそれぞれの観点からの改善点について聞くことができた。また、海外となると教育や組織の風習が違うため、日本では得られないような様々な見解を知ることができた面からしても有益な場であった。

学会を終えた現在、ライターズ・ワークショップで得たフィードバックを元に、学会誌での論文の発行に向け論文修正を行っているのと同時に、この論文は私の修士論文の一部ともなる予定なので、このテーマをより広く捉えた修士研究との関係性を検討している段階である。

4. 今後の展望

今回の学会を通して、この「パターン・ランゲージ」の学術コミュニティ内での自分の立場を確立できたと感じた。最先端のパターン・ランゲージ研究を行っている学者が世界中から集うこの学会は毎年開催されており、そこには一つのコミュニティが存在する。前述したような特殊な発表形式を採用している理由もこのコミュニティづくりの思想から来ており、お互いの研究内容について理解し合うことで切磋琢磨し、毎年の研究の進捗を共有する場としても機能している。

実は私もこの学会に参加するのは初めてではなく、過去にもいくつか論文発表を行っている。前回までは自分がこのコミュニティの一部であるという認識は薄く、発表を終えた後は他の学会参加者との継続的なつながりもできなかった。向こうからも、一緒に学会に参加していた井庭准教授の「一学生」としてしか認識されていなかったことも要因の一つである。しかし4回目の参加となった今回、過去の発表内容も含めて「料理のパターン・ランゲージ」の研究をしている人として憶えられるようになった。また、学会中様々な場面で私個人の知見を求められたり、来年度の学会開催の運営メンバー決定時に私の名前が上がるなど、一個人として求めるようになった。実際、来年度の学会では「Focus Group Chair」という学会中のワークショップをオーガナイズする役職を割り当てられるまでになった。

私の修士課程は今年度いっぱい終了する予定であるが、パターン・ランゲージの研究は修了後も続けていくつもりである。そのためにはこの学会コミュニティとの国際的な繋がりは非常に重要な要素となるため、今回の学会で得たこの縁と機会を大切にしていきたいと思っている。